

ともしび双書

神奈川県福祉作文コンクール 入選作品集



令和5年度版

まえがき

福祉作文コンクールは、昭和52年から始まり、今年で46回目となりました。次代を担う子どもたちに「たすけあい」や「思いやり」の心が芽生え、「ともに生きる」社会が実現することを願って実施してまいりました。

今年も、県内の小・中学校合わせて154校から4928編の応募がありました。児童・生徒数が年々減少していく中で毎年多くの方に参加いただいています。

応募作品は小・中学生別に、県内市区町村ごとの地区審査会および県最終審査会を行い、このたび、最優秀賞16編、優秀賞20編、準優秀賞20編の計56編の入選作が決定いたしました。

本作品集は、入選作品の中から、最優秀賞16編を掲載したものです。どの作品も、体験や経験を通じて感じたこと、考えたことなどが自分自身の言葉で丁寧にかかれていきます。広く県民皆さまの目に留まり、お互いを思いやり、たすけあい、支え合えるような優しい気持ちや社会全体に広がっていくことを願っています。

本来ならば、すべての入選作品をご紹介したいところですが、誌面の関係で、優秀賞及び準優秀賞は作品の題名・学校名・氏名のみを掲載させていただきましたので、ご了承ください。なお、作品は、児童、生徒の気持ちを尊重し、原則として原文どおりに掲載しておりますことを申し添えます。

結びにあたり、コンクールに参加した小・中学生の皆さん、指導にあたられた先生方、ご家族の皆さま、ご多忙のなか審査をお願いしました委員の方々に、心よりお礼申しあげます。

また、ご協力くださいました神奈川県、神奈川県教育委員会、各市町村教育委員会、日本放送協会横浜放送局、(株) テレビ神奈川、(株) 神奈川新聞社、(公財) 日揮社会福祉財団の皆さまに深く感謝申し上げます。

令和5年12月

社会福祉法人神奈川県共同募金会
社会福祉法人神奈川県社会福祉協議会

審査にあたられた方々

日本放送協会横浜放送局
コンテンツセンター長
株式会社テレビ神奈川
営業局営業推進室長兼営業推進部長兼事業推進部長
株式会社神奈川新聞社
クロスメディア営業局次長兼出版メディア部部长
公益財団法人日揮社会福祉財団
常務理事兼事務局長
神奈川県福祉子どもみらい局福祉部
地域福祉課長
神奈川県立総合教育センター
指導研究課指導主事
社会福祉法人神奈川県共同募金会
常務理事
社会福祉法人神奈川県社会福祉協議会
常務理事

佐々木 真
福原 直樹
土岐 邦彦
佐藤 恭平
笠井 熱史
千葉 周平
中島 孝夫
井出 康夫

(順不同/敬称略)

第46回神奈川県福祉作文コンクール入選作品集 目次

小学生の部

最優秀賞

神奈川県知事賞

はずかしい僕と助けたい僕

伊勢原市立伊勢原小学校

五年 萩原 隼翔……………1

神奈川県教育長賞

おはなししたよ

横浜市立浅間台小学校

一年 澁谷 和樹……………3

日本放送協会横浜放送局長賞

おじいちゃんの写真

平塚市立富士見小学校

六年 内田 陽太……………5

tvkかながわMIRAI賞

えがおがすてきなパンやさん

寒川町立寒川小学校

三年 関屋 愛絆……………7

神奈川新聞社長賞

手話教室の小松さん

座間市立ひばりが丘小学校

六年 湯川 芽衣……………9

日揮社会福祉財団ふれあい賞

僕の弟、あゆちゃん

海老名市立社家小学校

四年 林 蒼翔……………11

神奈川県共同募金会会長賞

笑顔があふれる社会へ

横浜市立西前小学校

六年 仁藤 愛花……………13

神奈川県社会福祉協議会会長賞

「心が通じたコミュニケーション」

小田原市立大窪小学校

五年 神田 和志……………15

中学生の部

最優秀賞

神奈川県知事賞

福祉ときょうだい児

慶應義塾普通部

三年 望月 颯人……………17

神奈川県教育長賞

APDと生きる

寒川町立旭が丘中学校

三年 中村 瑠花……………20

日本放送協会横浜放送局長賞

大切にしたいこと

寒川町立旭が丘中学校

三年 勝村菜々美……………23

t v k かながわMIRAI賞

かんちがい

秦野市立本町中学校

一年 森 玲亜……………26

神奈川県新聞社長賞

障害に寄り添うということ

茅ヶ崎市立第一中学校

一年 鈴木 千隼……………29

日揮社会福祉財団ふれあい賞 きょうだい児	神奈川県立平塚中等教育学校	二年	工藤 美岬	31
神奈川県共同募金会会長賞 あなたを見るところ	厚木市立林中学校	三年	奥田 萌叶	34
神奈川県社会福祉協議会会長賞 知的障害の妹の未来	伊勢原市立伊勢原中学校	三年	川内 康平	37
優秀賞・準優秀賞入選者名簿				41

小学生の部

最優秀賞

神奈川県知事賞

はずかしい僕と助けたい僕

伊勢原市立伊勢原小学校

五年 萩原隼翔

僕の兄は、今年の一月にシーバー病というかかとの骨に炎症が起こる病気でギブス固定しなければいけなくなり、松葉杖で二カ月間生活していました。

登校する時は父に車で送ってもらい、下校では学校に許可をもらいバスを利用していました。母に「今日はむかえに行けないから、帰り一緒に帰って荷物持ってあげて。」と頼まれましたが、友達と帰りがたかったし面どうでいやでした。

兄はランドセルが背負えないのでリュックを使っていました。しょう降口で待ち合わせして一緒に帰る時、みんなに見られて目立っていたのでとてもはずかしくていやな気持ちにな

りました。

でも兄は僕に「荷物を持ってくれると歩きやすく助かるよ。ありがとう。」と言ってくれました。ふと気づいたら、兄は人目を気にせず堂々と歩いていました。冬なのに顔に汗をかきながら一生けん命歩いている姿を見たら、はずかしいと思っていた僕の気持ち申しわけなくて何も言えませんでした。仕事から帰って来た母に「今日はありがとう。いぶき大変そうだったでしょ？」と言われて僕は正直に「みんなに注目されていやだったんだよね。いぶきはすかしくないのかな？」と言ったら母は「うーん：はずかしい気持ちよりも必死なんだからと思う。足をケガして不自由だけど前向きに頑張ってるからさ。いやだったら一緒に帰らなくて大丈夫だよ、ありがとね。」と言われて荷物を持つだけで兄の助けになるなら、明日もがんばろうかなと思いました。

身近に困っている人がいて初めて気付くことが沢山ありました。福祉は自分が出来るはんで出来ることを強制されずにすることが相手にとっても受けとりやすい助けになるのだと感じました。

最優秀賞

神奈川県教育長賞

おはなししたよ

横浜市立浅間台小学校

一年 澁谷和樹

ばあばのしゅわサークルに、いっしょにいった。きこえないひとはじめてあう。おはなしはできるのかな。

きこえないひともきこえるひとも、しゅわでおしゃべりをしていた。ほくは、

「こんにちは。」

としゅわであいさつをした。きこえないおとこのひとは、にこにこして、

「こんにちは。」

としゅわであいさつをしてくれた。おじさんは、ほちようきをつけていなかった。ほちようきをつけても、おとがきこえないんだって。びっくりした。ほちようきをつければ、きこ

えるとおもっていたんだ。きこえないって、まわりのひとのこえとか、おとがきこえない。だからかなしいのかな。

ブロックをして、まつていた。つくったインコをみて、おじさんが

「じょうずだね。」

とほめてくれた。しゅわなのかこえなのか、どうやってほめてもらったかは、おぼえていない。でも、ほんとうにほめてもらったんだ。なんでそうおもったんだろう。おじさんは、きこえないし、はなすこともむずかしい。おじさんのおもっていることが、ほくにつうじたのかな。おじさんとほくは、おなじだ。はなせたよ。

これから、きこえないひとたちとおはなしがもつとできるようになりたいな。しゅわにチャレンジしてみよう。たのしいおしゃべりができるようにね。

最優秀賞

日本放送協会横浜放送局長賞

おじいちゃんの写真

平塚市立富士見小学校

六年 内田陽太

最近の僕のなやみはおじいちゃんのもの忘れが多くなったことだ。

僕のお父さんとお母さんは働いているので近くにあるおじいちゃんの家に行くと急いで帰っている。急いで帰るのは、僕がおじいちゃんのことを大好きだからだ。おじいちゃんはおぼくが小さいころからカブトムシの育て方や竹の水をたづねるの作り方など、僕が喜ぶことをたくさん教えてくれた。しかし最近のおじいちゃんは少し違う。物忘れが多くなり、おばあちゃんにたくさん怒られている。おばあちゃんがイライラしてしまう気持ちもよくわかるし、昔のように物事がてきぱき出来なくなり、不安になるおじいちゃんのお気持ちもよくわかる。そこで僕はおじいちゃんとおばあちゃんがお互いに楽しく笑っていられるように、

お父さん、お母さんとお兄ちゃんに相談した。そしてある作戦を思いついた。名付けて「おじいちゃんワクワク大作戦」だ。それは夏休みの間、僕がおじいちゃんの家にとくさん遊びに行きいっしょに野菜を作ったり、しょうぎをしたりして過ごす作戦だ。作戦をするにつれて、今まで気づかなかったおじいちゃんのことを知ることができた。僕がしょうぎに誘うといつもめんどくさいと言っていたけれど、本当はこまの動かし方に自信がなくなっていたからだった。でもたくさんやっけていくことに思い出して来たようだった。また僕がピアノを弾いてみせると、おじいちゃんは昔がなつかしくなり、長い間弾いていなかったピアノを弾くようになった。その時の笑顔は僕が見た中で一番キラキラしていた。この作戦で僕がわかったことは、僕の少しの行動でおじいちゃんの生活がどんどん楽しくなるということだ。この笑顔がいつまでも見られるように僕は、おじいちゃんのそばで応援していく。僕の作戦は大成功だ。

最優秀賞

t v k かながわMIRAI賞

えがおがすてきなパンやさん

寒川町立寒川小学校

三年 関屋 愛 絆

わたしのおばあちゃんの家の近くにおいしいパンやさんがあります。でもはじめて行った時に、なんだか今まで行ったことのあるパンやさんとちがうような気がしました。その時はだれにも聞かなかったけれど、次に行った時にお母さんに聞いてみることにしました。

「このパンやさん、なにかちがうよね。」
と聞くと

「ここはしようがいをもっている人たちが働いている所なんだよ。」
と言われました。

わたしはしようがいという言葉の意味がよくわからなかったので、国語じてんで調べてみ

ることにしました。何かをする時に、じゃまになるものごと。さまたげ。体のきのうが十分に働かないこと。と書いてありました。お母さんにくわしく聞いてみると、そのパンやさんはしょうがいのある人の働く場、き会を通してさぎょうくん練やしゅうろうしえんをしていると教えてくれました。お会計の時にキヨロキヨロしていたり、何度も同じことを言っていたのでどうしたのかなと思っていたけれど、自分で調べたりお母さんに話を聞いて理由がわかったのでよかったです。

世の中にはいろいろな人がいます。目や耳が自由な人、車イスに乗っている人、手話を使う人。わたしもにがてなことがたくさんあります。でもできないことをばかにするような人がいたら悲しいです。パンやさんと働いている人たちはみんなにこにこえがおでした。えがおがすてきなので、わたしはそこへ行くとすぐ幸せな気持ちになります。人を幸せな気持ちにできるのはすごいことだと思うし、わたしもえがおでだれかを幸せにできるようになれたらいいなと思います。

最優秀賞

神奈川新聞社長賞

手話教室の小松さん

座間市立ひばりが丘小学校

六年 湯川 芽衣

私は最近、手話教室に通い始めました。その先生は耳がきこえない小松さんという方です。「手話、やったことないから、先生が手話で何を言っているのか分からない。どうしよう。」と不安でいっぱいでしたが、ていねいに通訳してくれる先生もいて、その方が、小松さんが何を伝えているのか、声にして教えてくれます。

私は、手話教室に通う前は「障害をもっている人ってかわいそうだ」という考えがありました。ですが、小松さんからは、そんなことが一ミリも伝わってきません。むしろ、とても元気で明るく「私は幸せだ。」とおっしゃるくらいです。そして、いつも笑顔です。

もう一つ、想像とちがうことがあります。手話教室に通うまで、耳が聞こえない人に会

ったことがなかった私は、「耳がきこえなかったら顔がムスツとしているのだろう」と勝手に思っていました。ですが、想像と全くちがいで、小松さんはとても表情豊かで面白い人です。

小松さんから「手話で一番大切なのは、表情だよ。がんばろうね。」と言われました。小松さんは手だけではなく、顔や上半身の動きを上手に交えて、私達に語りかけてくれます。そして、私の目を優しく見つめながら、私が伝えたいことを聞いてくれます。小松さんと会話をしていると、優しい気持ちになります。

私は、声にしなくても、表情から気持ちや伝えられること、しっかり目を見てコミュニケーションをとると、気持ちに通じ合うことを小松さんから教わった気がします。

今は色々な手段でコミュニケーションがとれる時代です。画面だけのやりとりだけでなく、目を見て、相手を思いながらのコミュニケーションを大切にしていきたいです。

最優秀賞

日揮社会福祉財団ふれあい賞

僕の弟、あゆちゃん

海老名市立社家小学校

四年 林 蒼 翔

僕の弟はしゃべるのが下手で、二年生なのに数もひらがなもわからない。やっと僕の名前が言えるようになったが、言いたいことはなかなか言えない。僕の言うことも伝わらないことが多く、急に怒って「お兄ちゃんごめんなさいする」と言い始める。何で怒っているのか、あやまりたいのか、それもわからないから面倒でたまらない。だけど無視すると、お母さんに僕がしかられるから、それもまた面倒で僕があやまる。なんでいつも「僕が」って思うことがたくさんある。僕だって勉強をやらずにすべり台で遊んでいたし、簡単な宿題をしてほめられたい。僕はバスケットに水泳、ダンスといっぱい習い事をしてがんばっているのにほめられない。「あゆちゃんだけずるい」と思っていた。

でも僕は気づいた。弟はしゃべるのも伝えるのも下手だから、ただ言えないだけで僕と同じように「お兄ちゃんずるい」と思っているのかもしれない。バスケのルールがりがりかきできれば、楽しいからやるかもしれない。ダンスをかつこよく踊ればモテると思いやるかもしれない。僕は僕の考えで弟のことを決めつけていた。

これからは弟が何を思い、伝えたいのかを観察することにする。弟の好きなことや、得意なことがわかるお兄ちゃんになりたい。そして弟のことをりかいしてもらえ居場所をつくりたい。僕の友達も弟がいてもバカにしたり、いやなことを言う人はいない。急に怒ってさけんでも、誰もうるさいとか変だと言わずに遊んでくれる。そのままの弟を受け入れてくれる。「あゆちゃん」とたぐさんの時間を一緒にすごすことで、どこにでもいる自然であたり前の姿になっっている。これから先、あたり前の存在で続くように僕は弟と付き合っていこうと思う。

最優秀賞

神奈川県共同募金会会長賞

笑顔があふれる社会へ

横浜市立西前小学校

六年 仁藤愛花

皆さんは、自分の身体が思い通りに動かせない時、どんな気持ちになるか考えたことはありますか。私があります。なぜかという私の兄がダウン症で、生まれつき筋力が弱く、上手に歩く事ができないからです。知的な発達の遅れもあり、一人で行動する事は難しいです。常に誰かの手助けを必要とする兄と生活をしていると、兄自身も兄を支える家族も大変だと思ふ事もあります。

しかし、兄との生活は苦勞もありますが、それ以上に嬉しい気持ちになる事が沢山あります。兄が頑張る姿、感謝を伝えてくれる姿、何気ない事に喜ぶ姿をみると私まで嬉しくなり、元気づけられます。兄と参加した行事でボランティアの方に助けてもらった時は、兄はもちろ

ん私もとても嬉しい気持ちになりました。私もボランティアに参加してみようと興味を持ち、将来の夢にもつながりました。

兄には、車いすを使い日常生活を送っている友達も沢山います。その友達と過ごしている時に、気になる言葉がありました。それは、「すみません」という言葉です。手が届かずに助けてほしい時、段差や幅のせまい場所を通る時など色々な場面で耳にしました。そんな時の「すみません」が「ありがとう」と言える社会なら今よりもっと沢山の笑顔があふれると思います。私達の暮らす社会には誰もが安心して暮らすための仕組が整っています。その仕組をより良い仕組にするためには私たち一人一人の協力も必須だと思えます。

「なんとなくはずかしい」で片付けず、今、目の前にいる相手の気持ちに寄りそってみる。「何かお手伝いする事はありますか。」と声をかける、ボランティア活動に参加する…私達小学生でもできる事は沢山あります。勇気を出して一歩踏みだす事で、今よりもっと笑顔があふれる社会をめざしたいと思えます。

最優秀賞

神奈川県社会福祉協議会会長賞

「心が通じたコミュニケーション」

小田原市立大窪小学校

五年 神田和志

僕の母は、病気の人の家で介護をする「訪問介護」の仕事をしている。ある時、母が「今日は利用者さんと口文字を使ってお話ができたんだよ。」とうれしそうに話をしてくれた。その時、僕は初めてALSという病気や、「口文字」のことを知った。

ALSという病気は、病気になって数年で全身の筋肉が動かなくなり、寝たきりになったり、声を出すこともできなくなる病気だ。声も出せなくなった人は、口文字を使ってやりとりすると母が教えてくれた。僕もやってみたいと思い、母からやり方を教わった。口文字は、口の形でまず母音が何かを判断して、次に相手の瞬きでどの文字なのかを特定するそうだ。最初のうち、僕はすぐに声に出してしまい、母に「声は使えないんだよ。」と言われてしまう

やさしかった。

口文字のやり方に慣れると、実際にその利用者さんと会ってお話したいと思うようになった。そこで、僕は手紙と白鳥のイラストを書き、母に渡してもらった。「手紙を見せたら、笑顔でともうれしそうだったよ。」と母が教えてくれたのがうれしくて、僕はやはりこの人に会ってみたい、と思った。そこで、七月の終わりに、利用者さんも参加する、障がい者との交流会に参加した。会場にいる利用者さんは、大きな車椅子に乗って、普通に座っている人のように見えた。近くへ行くと僕の顔を見てニコニコしてくれたけれど、やはり声は出せないようだった。僕は何かやりとりしたくて、「好きな芸能人は誰ですか」と聞いた。「や・ぎ・わ・え・い・き・ち」と、いうのが答えだった。僕はその答えを解読するのに、十〇分位かかってしまった。それでもお互いに言葉が繋がって、利用者さんがうれしそうに笑った時、僕もとても嬉しくて、直接お話ができて良かったと思った。

中学生の部

最優秀賞

神奈川県知事賞

福祉ときょうだい児

慶應義塾普通部

三年 望月 颯 人

福祉ってなんだろう。

高齢者や、障がい者、通常の生活をしていくのが困難な人のために、皆で助け合って、補完し合い、誰もが人間らしく暮らせることであると私は考えます。

私の弟は重度知的障がい者で、特別支援学校の小学部五年生です。

学校ではその児童個人に合わせた教育が行われていて、弟がとても大切にされている、と授業参観に行った時に感じました。

弟は発語がなく意思疎通が難しく、また、おむつを着けて生活しています。私たち家族は、

弟の快、不快を表情や声から読み取ります。笑顔は快、かんしゃくは不快、などです。

そのため我が家の日常生活は弟中心となります。大きな赤ちゃんと生活していると伝えれば伝わりやすいでしょうか。

弟は自由に動きまわれますので、家の中で思いもよらないイタズラをし、両親や私を困らせます。叱つても注意しても、聞き入れ、理解することが出来ません。

健常な赤ちゃんはいずれ成長し、大人になります。しかし、残念ながら弟の障がいは治りません。

私たち家族の困りごとはこれからも続きます。

私のような立場を「きょうだい児」ということを知ったのは小学生の終わりごろです。

その頃は、弟はまだ小さく、イタズラやかんしゃくも私たち家族が止めたり、時には力づくで押さえついたり出来ていたので、将来のことが想像つかなかったのです。

しかしながら弟は、今後出来ることは殆ど増えないと予想されるにも関わらず、身体だけは成長していきます。

最近他害も出始めた、弟が利用している放課後等デイサービスの先生から伝えられており、私は、両親は、今後一体どうなるんだろう。私たち家族は人間らしく暮らしていけるのか、とつい悩んでしまいます。

弟はもちろん障がいの当事者であり、生きづらいことに間違いはありません。

なので、人間らしく、尊厳を守られる生活のできるサポートを受けなくてはなりません。

そのコントロールを担うのは今は両親、両親が出来なくなったら私ということになります。

私は今となっては「きょうだい児」として今後の人生を送ることに不安を感じています。

自分の心を守りながら、人間らしく生きていけるのかどうか、悩まずにはいられない自分を、正直に言っただう受け止めていいか分かりません。

両親も、自分たちの子とはいえ、障がいは想定外だったはずです。

父と母ともに、今後もずっと続く弟への対応のかたわら、私の将来を案じ、私に対して申し訳ないと感じている部分もあると、手に取るように伝わって来ます。

改めて福祉って……と考えると私は渦の中にいるのか外にいるのか分からなくなってきました。

誰もが人間らしく暮らせるように。私も、そして両親も。

私にしか出来ないことがあるかもしれない、誰かの役に立てるかもしれない。

私は「きょうだい児」という立場から、目線から、考え、調べ、未来の福祉を何らかの形で支えていけたら、と思っています。

最優秀賞

神奈川県教育長賞

APDと生きる

寒川町立旭が丘中学校

三年 中村 瑠花

私は、APD（聴覚処理障害）という障害を持っています。APDとは、聴覚には問題がなく、音を聞き取ることができませんが、音を言語に変換し、脳で処理して「話」の内容を理解することが難しい障害です。一対一で静かな場所で話しているときに症状が出ることは少ないのですが、雑踏の中にいるときや、複数から同時に声が聞こえてくる場合は、きちんと会話のキャッチボールをすることが難しいです。また、複雑な内容ではなくても相手の話を一度で正しく理解するのが苦手で、繰り返し説明をしてももらうことも多く、周囲にも迷惑を掛けてしまいます。

日本は、欧米と比べてAPDの認知度はとても低く、勇気を出して障害のことを話してみ

でも、理解されにくい状態だそうで、私も話した後の反応が怖くて同じ部活の信用できる数名にしか打ち明けていません。何度も聞き返したり、聞き間違いが多かったりして、周りには迷惑を掛けてしまうので、「障害のことをきちんと話したほうがいい」と両親や先生に言われているのですが、クラスメイトや部活の仲間と言うのは、やはり怖くてできませんでした。聞き間違いをしてしまう障害のせいで、小学生の時は、「天然な子」「抜けている子」と言われていました。

私は、病院でAPDだと診断されてから、くわしい症状や対策方法、治療について等、たくさんのことをインターネットで調べました。「聞き取りにくい」という症状が主となっていたこともあって、対策については周りの人の協力が必要不可欠だとどのサイトにも書いてありました。「確かにそうするしかないのかな」という同意の気持ちと、「どんな風に伝えればいいのだろう」という迷いがあって、不安ばかりが募りました。周りに相談するべきだと分かっているけど、反応が怖かったり、その後の関係性に不安を抱いてしまったりなどで周りに言うことができずに苦しむ患者さんは世界にたくさんいると思います。そこで私は、そんな悩みを持った人が生きやすくなるにはどうしたらいいのか考えてみました。一番大切だと思ったのは、周囲の人にその障害や病気の正しい知識を持ってもらい、その上でそれをその人の「個性」だと認めることだと思います。現代は、知りたいことがあればインターネットで簡単に情報を得ることができます。さらに、ジェンダーレスや考え方などはじめとした多様性に向かう時代です。なので、その症状を障害や病気ではなく、一つの「特徴」や「個性」

として受け止める姿勢を持つことが大切なのではないかと思えます。障害を持つ人自身も、「認めてもらえる」ということが分かっているれば、勇気をもって多くの人に相談をすることができるのではないかと思います。

私は授業内容や部活中に先生から指示が出されたときに言葉を聞き取ることができずに困ってしまうことが多々あります。ですが、事情を知る友達が聞き取れなかった部分を教えてくれて、なんとかみんなと同じように生活できています。

私は、APDという障害になって、会話をすることが難しく感じるようになりました。でも、会話が難しくなった代わりに人の優しさに敏感になれたように思います。事情を話した友達はもちろん、話せていない友達も、「分からない」というと私が理解するまで何度も説明してくれます。

私にとってAPDは、人の優しさを常に再認識させてくれる一つの「個性」です。困ることも多々あるのですが、そんな私と仲良くしてくれたり助けてくれたりする友達を大切にしたいし、その人が困っていたら私も何かしたいと思っています。

そんな気持ちを教えてくれたこの「個性」と、私は一緒に生きていきます。

最優秀賞

日本放送協会横浜放送局長賞

大切にしたいこと

寒川町立旭が丘中学校

三年 勝村 菜々美

九十五歳で亡くなった私の曾祖母は地域の人から好かれる、ちょっとした有名人でした。「大きいおばあちゃん」と呼ばれ、親しまれていた彼女は名前通り大きな心をもった優しい人でした。それとは別に、過去に地域の病院で婦長を務めたことがある立派な人でもありました。そんな曾祖母も元気で長生きだったものの、年を重ねるごとに物忘れが激しくなり、できることが少なくなっていきました。そんな姿を見て、一時は老人ホームなどの施設に入居させることも考えましたが、本人がそれを拒んだため、自分達で介護することを選びました。しかし、曾祖母の家へ行くためには隣の市へ行く必要があり、つきっきりで介護することは難しく、毎日を通うことはできませんでした。さらに、もともと少し弱かった心臓や高血圧の

ことで通院していたこともあり、一人で過ごす日ができてしまうことに心配がありました。そこで平日の五日間、訪問して家事の手伝いや介護してくれるヘルパーの方や訪問看護師の方にお世話をしてもらうことにしました。休日は私達が訪れ、掃除をしたり、一緒に昼食を食べたりして過ごし、週末は曾祖母に合わせた生活になっていきました。こうして曾祖母の介護に奮闘する日々が始まりました。

介護の日々が始まってから、様々な問題に頭を抱えました。私達が一番悩んだのは食事のことでした。ヘルパーさんは曾祖母のために昼食を用意してくれることが多々ありました。曾祖母が昼食を食べ始める前にヘルパーさんは帰ってしまうのですが、翌日に様子を見に行くと昨日の昼食が手つかずで残っていることばかりなのです。「昨日の昼食は代わりに何を食べたの。」と尋ねるとよく「あんパンを食べた。」と答えていました。あんパンは曾祖母の大好物でおやつとして用意していたのですが、どうやらあんパンなどの甘いお菓子のみを昼食として食べているようでした。曾祖母の娘である、私の祖母は健康や栄養のことを心配し、昼食をしつかり食べてお菓子を昼食代わりにしないように普段より一段とキツク叱りました。しかし、私の父は「残り人生はそれ程長いわけではないのだから、好きにさせればいいのではないか。」と言います。私は二人の意見に複雑な気持ちを抱きました。もちろん祖母の意見は曾祖母の健康にとつて一番の解決策だとは思いますが。しかし、同時に曾祖母の健康を思うことだけが、彼女を大切に思う気持ちではないと思うのです。好きなことを自由にする姿を尊重して、認めてあげたい。でも、健康で長生きであってほしい。一つの共通な気持ちか

ら生まれた二つの愛の形が私の葛藤を生みました。結果的に私達はきちんと昼食をとって、お昼を食べ終わった時間を見計らってあんなパンを持つていたりしました。

曾祖母が亡くなった今、この選択が最も良かったのか、効果があつたのかはわかりません。また、どちらの選択が曾祖母にとって良かったのかもわかりません。この問いに正解がないのと同じように介護に正解はないと思います。しかし、正解はありませんがヒントならあります。私達家族は曾祖母の健康を大切にしたいと思い、根気よく介護することを選びました。それを大切にできたことで私達は自分達の選択に後悔はしませんでした。介護をするうえで大切にしたいことはなんですか。それが介護の行く先を左右するヒントなのかもしれません。

最優秀賞

t v k かながわMIRRA賞

かんちがい

秦野市立本町中学校

一年 森 玲 亜

私は、小さい頃、障がいを持っている人に対して、「怖い」という一方的な感情を抱いていました。おそらく、このような感情を抱いていたり、ただ漠然と「かわいそう」と感じていたりする人は少なくないと思います。私が「怖い」と感じていたその理由は、特にこれと言ったこともなく、今思えば勝手な思い込みでした。

私が「怖い」と感じていたことについて考えてみると二つの理由があるな、と考えました。一つ目は、見た目です。手足にマヒがあると、動作がぎこちなく、恐怖を感じさせるアニメやホラー映画のような動きに似ていたからです。二つ目は、私がびっくりしてしまうような大きな音を立てたり、声を上げたりしていたからです。どちらの場面においても、私はその

場に居合わせたときにびくりした表情をしたと同時に相手に対して嫌な表情を見せてしまったかもしれません。そして、翌日以降は同じ場面にそうぐうしないようにさけていることもありました。

私が幼稚園生のとき、私の祖母は股関節がすり減っていて、足が思うように動きませんでした。私自身はあまり記憶にありませんが、母は写真を見せながらこのような話をしてくれました。

「ばーばが足を引きずって歩いているとき、玲亜が自然と手を繋ぎに行ったり、背中を押したりしてあげていたんだよ。」

孫として当然のことをしているだけ。そう思っていました。動作がぎこちない人に対して「怖い」と感じていることに対してハッとしました。足を引きずっている祖母も、手足にマヒがある人も、何も変わらず同じであることに気がつきました。と同時に生きているということについて私自身も変わらないのだと気づきました。

私の母は特別支援学校で働いています。母の受け持つ生徒も大きな声を出したり、時には手を出したりするそうです。母は、

「どの生徒でも心が優しい子なんだよ。」

と腕に傷を付けて帰ってきた日も話しています。確かに、今まで関わったことのある、障がいのある友だちも、心優しい思いやりを持っているなど改めて気づきました。

私の父は特別支援学級で働いています。父は、

「世間的に気になる行動は、社会で過ごしている人の気持ちを表しているんだよ。」「受け入れられる気持ちや、障がいに対して深い理解があれば、誰も何も気にならない社会になる。」
と言っていました。私は二人の話を聞いて、「かわいそう」と思っていた気持ちが間違えていたんだと感じました。

自分が正しい知識を持たないまま、感情で決めつけるのはよくないことがわかりました。ただ、その事に気づけてよかったと思います。怖いと感じたことも、かわいそうだと感じたことも、自分が同じ立場なら相手に思っただけで欲しくないことだと気づきました。自分の考えを違う視点から見ること、考え方を変えられることができたし、身近な人たちはおそらく、「怖い」「かわいそう」という感情も多くあると思います。正しい知識を持った社会になるように一人一人の福祉への興味を持つてほしいと思います。これからもいろいろな物事に対しての正しい知識を持つことの必要性を学んでいきたいです。

最優秀賞

神奈川新聞社長賞

障害に寄り添うということ

茅ヶ崎市立第一中学校

一年 鈴木千隼

僕の祖父はパーキンソン病だ。今から十二年前に発症をし、仕事を続けながら治療をしている。この病気は、体が動かしくくなったり、震えたりするなどの運動機能に関わる症状が出て、少しずつ悪化していく。祖父は薬の効果も切れてくると、体を動かしづらくなり、歩くことが難しい。でも、少しでも今の体の状態を保てるようにと朝四時に起きて仕事に向かう。こんなに早起きなものは、身支度にとても時間がかかるからだ。トイレをするのも、シャツを着るのも、人の何倍も時間がかかる。普段の生活の中では、お風呂に入ることや階段の上り下りが特に大変で苦労するようだ。でも、僕が小さい頃から祖父はこの病気になっていたので、少し動きがゆっくりで、腰が曲がっていても、毎日遊んでくれたり、保育園まで

迎えに来てくれたりしていたので、あまり気にならなかった。

祖父が障害者手帳を取ったのは、五年前のことだ。障害者手帳は、自分が障害者であることを証明することができ、様々な場面で、福祉サービスを受けることができる。今回、この作文を書くために、祖父と病気のことについて色々話をし、障害者手帳を持つていることも初めて知った。障害者手帳を取るまで自分の障害について悩んだことがあったそうだが、今は自分の体のことも受け入れ、人からどう見られているか気にしないようにしているようだ。

祖父の願いは、パーキンソン病だからできないことが沢山あると周りの人に思ってもらいたくないらしい。もちろん、自分でできないことが多くなっているのは理解しているがこれから何でも自分でチャレンジしていきたいと思っている。障害があるからできないという偏見を持たずに温かく見守って欲しいと思っている。そして、どんな障害でも受け入れてもらえる社会であってほしいと考えているようだ。

僕は祖父の気持ちを聞いて、障害に対する気持ちが少し変わった。前は、助けてあげようという気持ちで、自分が先にやってあげていたけれど、今は違う。障害があるとできないこととはたくさんある。でも、まずは相手が何をしたいのか、どうしたいのかという気持ちを聞くことが、障害を受け入れる最初の一步になる。そして、困っていたら「一緒に」と寄り添う姿勢が大切だと思う。今度、祖父と食事をし、何が食べたいのか聞く場面があったら、まず「どうしたい？」と聞くと思う。

最優秀賞

日揮社会福祉財団ふれあい賞

きょうだい児

神奈川県立平塚中等教育学校

二年 工藤美岬

あなたは「きょうだい児」という言葉を知っているだろうか。きょうだい児とは、重い病気や障害を抱えている兄弟姉妹がいる子どものことである。そして私もきょうだい児である。私の兄は重度の自閉症と知的障害を持っている。

きょうだい児だからといって特別なにかあるわけでもない。ただ普通に兄弟姉妹が居るだけだ。しかし、その兄弟姉妹が病気や障害があるだけで特別視されてしまう。そうなるとう世間の目が鋭くなる。私が兄のことを説明すると、かわいそうとか聞いてはいけないものを聞いてしまったような顔をする。

意味不明な発言や、見た目に合わない幼稚な行動をする兄に不信感を持つのは無理もない。

しかし、そんな兄を見て傷付くような言葉を私にかけられたことがある。小学校低学年の頃、兄と同じスイミングスクールに通っていた同級生の男子に、

「お前の兄ちゃん、いつも変な事をしゃべってて気持ち悪い。」とからかいながら言われたことがある。私はその言葉に心を抉られた。当時は小学校低学年だったのもあって、おそらく言った本人たちは兄が障害を持つてゐることは知らなかったと思う。しかし、私はこの言葉をかなり引きずつてゐる。今でも兄と一緒にいるところを人に見られるとこの言葉を思い出してしまふ。

他にはこんな経験がある。友達と話していると、自分の兄弟や姉妹の話になった。みんなが兄弟の年齢とか話していると、もちろん私の兄の年齢も聞かれる。兄は二十歳であり、本来は大学や就職をしている年齢である。二十歳であることを説明すると大体、

「どこの大学通つてゐるの。」

と聞かれる。そして、

「大学は行つてないで、就職してゐるよ。」

と答える。そう答えると友達は

「あつ働いてゐるんだ。」

と少し驚くような顔をする。この会話だけだと兄は高卒で働いてゐると思われ。そのため後に、

「障害を持つてゐて大学には行けないから、障害を持つてゐる人でも働けるところで働いて

いるよ。」

と補足する。そうすると聞いてはいけないような顔をされ、気まずい空間になる。そういう顔をされるのはしょうがないことだとは分かっている。分かっているが悲しい気持ちになる。障害持ちの兄は友達にとつては異様かもしれないが、私にとつては普通のことなのである。だからこそ、あのような顔をされると孤独感や周りとは違う異質感を感じてしまう。

私はきょうだい児を特殊なものではなく、普通ととらえてほしいと思っっている。それと同時に障害に理解がある世の中になってほしいと思う。障害にも、身体の欠損など目に見える障害と脳や心に障害がある目に見えない障害がある。目に見えない障害は、障害者か健全者かわからない時があるが、なるべく思いやりを持ってほしい。また、きょうだい児には普通に接してほしい。周りと同じ兄弟姉妹がいるだけだから。

最優秀賞

神奈川県共同募金会会長賞

あなたを見るといふこと

厚木市立林中学校

三年 奥田萌叶

「相手のことを想って考え行動する」これはいろんな大人から言い聞かされてきた言葉だ。私達が社会で生活するためには人と関わりあつて生きていかなければならない。そのためのルールのようなものを私達は「道徳」と呼んでいる。だが、私は「本当に相手を見た相手を想つた行動」はできていないように感じる。

私は一型糖尿病を患っている。生活習慣病の方ではなく、体質的なものだと医師から教えてもらった。糖尿病とは、エネルギーを取り入れるときに使うホルモンがなくなつてしまう病気だ。完治するための治療方法としては、ホルモンを分泌する臓器の移植や、その細胞の移植。とてもすぐにできるものではない。そのため、私は注射を使いホルモンを体内に入

れてエネルギーを取り入れられるようにしている。これを聞くと大体の人が「大変だな」と感じたり「注射が痛そう」などと思うだろう。私はこの話をしたとき友人から「かわいそうだね」と言われたことがある。おそらく同情の意を込めて放った言葉だろうと今では思う。だが、当時の私は心を強く握りしめられたような気持ちになった。

私は、みんなから見ると「かわいそうな人間」になってしまったらしい。今まで私を見てきた人々の目は、日常生活に支障をきたす「障がい」によって大きく変わってしまったようだ。

私はこの「障がい」をさほど気にしていなかった。なぜなら制限されたのではなく、必要なことが増えただけだからだ。それに、悲しんでいたって治るわけではないからだ。だが、その言葉を聞いたとき、はつきりと私と世間の価値観がズレていることを知った。そして私は何と言おうが全てがまんしていると感じとられてしまうことも。障がい者はこんな気持ちなのだろうと推し量られ「型」に入れられてしまうことも。さらに、これらは全て「障がい」という一部分を見て「私」のことは一切、見られていないことも。私はここで初めて、健常者との身体的な差だけではなく価値観などの精神面でも大きな差があることを知った。

だが、今一度考え直してほしい。確かに私は気をつけなければならぬことが増えた。だが「私らしさ」を形成するものは変わったのだろうか。否、変わっていないのだ。

障がいを持った人に対してどう声をかけたら良いのか、それは私も分からない。人の感情は、人それぞれの個性なのだ。でも、その人自身を見ず「障がい」という特徴に限定して言葉をかけるのは相手を見れていない証拠だ。その人にはその人にしかない何かを必ず持っている

から。

私達が学んできた「相手を想って考え行動する。」あなたは一体、相手の何を見て、思い行動してきたのだろうか。今、障がいを背負う身となった私は、周りの目の変化に気づいた。私という個性は何も変わっていないのにだ。大体、このような内容を取り上げると優しい言葉、対応の大切さを教えられることが多い。それも大切なのだが、価値観などの差については、あまり取り上げられないように思う。私達は助けられることが多いかもしれない。でも、決して助けられないわけではないのだ。

どんな状況になっても変わらない「相手への思い」を持つ。そのためには「障がい」という表面的なものに惑わされずその人自身を見ることが大切なのだ。そして、それこそが今、私達ができる「相手を想った行動」第一歩なのかもしれない。

最優秀賞

神奈川県社会福祉協議会会長賞

知的障害の妹の未来

伊勢原市立伊勢原中学校

三年 川内 康平

突然ですが、僕には知的障害をもつ妹がいます。名前を、「川内くるみ」と言います。先天性の知的障害で、本人の年齢は十一歳なのですが、精神年齢が一歳半で止まっているため、肉体と精神に九歳半のギャップがあります。まだ言葉も話せません。定義される中で最重度の知的障害です。今回は、そんな障害をもつ子やその家族の現実、知的障害児に対する福祉が今後どうあるべきか、みたいなことを、僕なりにお話しできればと思います。

先述のとおり、くるみは、重度の知的障害を患っています。そして、そんなくるみとの生活は、決して楽なものではありません。ここに、いくつかの例を挙げていきます。

まず、くるみは、自分一人で何かをすることがほぼできません。ご飯を食べる、トイレに

行く、服を着る、お風呂に入る、寝る。家にいる間は、全ての行動に家族の誰かがつきつきりになります。そして、最近困っているのは、「吐くこと」です。自分の限界を無視して、目だけひたすらに欲しがるので、気をつけなければ気持ち悪くなるまで食べ続けます。その上、食べた直後に家中を走り回ったりするので、その場合大抵吐きます。気づいたら家中に吐しゃ物が撒き散らかされていて、家族総出で掃除。というのも珍しくありません。また、くるみはイレギュラーを非常に嫌う傾向にあります。休日の午前中は近くの温水プールに行くのですが、それが習慣化していて、何かの事情でスケジュールが歪むとかんしゃくを起こして暴れ回ってしまいます。こんな感じの生活なので、家にいるときは本当につきつきりで面倒を見なければなりません。

「じゃあ施設に預けてしまえばいいじゃん」そう思うかもしれませんが。しかし、ことはそう簡単な話ではありません。実際に、くるみは県立の養護学校（健常者でいうと小学校）の他に、放課後デイサービスを利用して夏休みなどの長期休みでは、三分の一くらいは、朝から夕方まで面倒をみてもらう日があります。しかし、ここはくるみにとって居心地があまり良くないようで、夏休みの朝に施設へ出発する準備が始まると、半泣きになって僕にくっついてきます。「行きたくないよ」という本人なりの意思表示です。あまりに酷いときはその日だけ行くのをやめたりするのですが、そうなるとテンションが百八十度変わって元気にはしゃぎ回ります。やはり、彼女にとって一番居心地のよい空間は「いつもどおりの家で過ごす日常」なのです。

今はまだ何とかやっています、もし親がくるみの面倒を見きれなくなったらと思うと、測り知れない不安に襲われます。自分の将来すら不安でいっぱいなのに、そんな状態でくるみの面倒をみてあげられるとは思えない、そうなれば、本当に社会福祉に全てを任せられない。そう考えることもあります。では、くるみのような障害者に対して、どのような福祉が必要なのでしょう。それは、「一人一人に見合った福祉」です。現状は、「障害者」に対する一くくりの支援という感じがしますが、それぞれの障害のレベル、傾向に合ったサポートがなされて初めて、障害者に対する十分な福祉が行き届いていると言えると思うし、今現場に求められ、必要とされているのはそういう福祉なのです。

「くるみ」は平仮名でくるみと書きます。漢字で書くとしたら、「来未」だったと母が言っています。この先、くるみがどう生きていくのか。全く想像もつかないし、不安だけでも、名前の通り、くるみに幸せな未来が来ることを、僕は心の底から願っています。そして、そのためなら僕は兄として、どれだけの間も、どんな努力も、決して厭わないと誓います。



神奈川県福祉作文コンクール入選者名簿

小学生の部

優秀賞

すてきな言葉	開成町立開成小学校	六年	山田
月一回のじじとのリモート面会	大井町立相和小学校	四年	国谷
やさしい大すきな大ばあば	平塚市立吉沢小学校	二年	金子
病気の子供たちと福祉	横須賀市立桜小学校	三年	木次谷
自分なりにできることを	横浜市立平戸小学校	五年	森山
音楽の力	開成町立開成小学校	六年	植田
私と、仲間のやさしさ	開成町立開成南小学校	六年	松原
ばあばのお手つだい	横浜市立瀬ヶ崎小学校	一年	齋藤
盲導犬の存在	横浜市立森の台小学校	四年	村中
足のこっせつが教えてくれたこと	横浜市立奈良小学校	五年	関口

準優秀賞

ぼくのおばあちゃんを通しての福祉	茅ヶ崎市立松浪小学校	四年	柳沼雄信
「車いすを必要とする人への思い」	寒川町立一之宮小学校	四年	栗原結望
私の病気について知ってください	聖セシリア小学校	六年	檜山佳奈
周りの人のやさしさ	座間市立相武台東小学校	五年	前村羽海
「思いやりの心」	聖セシリア小学校	六年	森田りら
福祉について私ができること	横浜市立相沢小学校	四年	大谷歩菜
福祉の輪を広げる	湯河原町立東台福浦小学校	五年	関野雪舞
思いやりや助け合いの大切さ	秦野市立鶴巻小学校	四年	能勢彩由佳
白杖体験から学んだこと	厚木市立依知南小学校	五年	渡邊龍世
やさしい公園	寒川町立一之宮小学校	二年	尾崎千咲

中学生の部

優秀賞

笑顔を増やすために	大井町立湘光中学校	二年	栗田佳歩
外見ではわからないこと	伊勢原市立山王中学校	二年	名淵結香
私と家族の福祉	葉山町立南郷中学校	一年	濱野夢那
私たちにできること	寒川町立旭が丘中学校	三年	横野ひより
私の髪の毛は、誰かのもとへ	大磯町立大磯中学校	三年	荻村明希穂
なぜ人は献血するのか	横須賀市立鴨居中学校	二年	澤田紗栄
高齢者に寄りそって	大井町立湘光中学校	一年	清家陸央
曾祖母と私	海老名市立今泉中学校	二年	中尾優那
平等であるということ	伊勢原市立成瀬中学校	三年	大倉志乃
世代を超えた地域交流	開成町立文命中学校	三年	竹内勇太

準優秀賞

思いやりのための思いやり ありがとうって伝えたかった	川崎市立宮内中学校	三年	岩月香奈
みんなの理解	開成町立文命中学校	三年	三浦美岬
私に出来ること	慶應義塾普通部	三年	松尾丈世
障害者と健常者	茅ヶ崎市立第一中学校	一年	鴨川栞音
伝えやすい、暮らしやすい社会へ	葉山町立南郷中学校	一年	武重夢花
曾祖父母との暮らし	川崎市立塚越中学校	二年	吉田涼太
もう一度	南足柄市立南足柄中学校	三年	西山実千花
福祉って何だろう？	川崎市立塚越中学校	三年	枅山奏心
ここではなして	葉山町立南郷中学校	一年	高野凜菜
	松田町立松田中学校	三年	西條桃重

神奈川県福祉作文コンクール入選作品集 令和5年度版

令和5年12月発行

発 行 者 社会福祉
法 人 神奈川県共同募金会
〒221-0825 横浜市神奈川区反町3-17-2
電話 045(312)6339

社会福祉
法 人 神奈川県社会福祉協議会
〒221-0835 横浜市神奈川区鶴屋町2-24-2
電話 045(312)4813

印 刷 神奈川新聞社

社会福祉法人 神奈川県共同募金会
社会福祉法人 神奈川県社会福祉協議会